

## 枯山水様式庭園の水景12形態分類による考察

千葉工業大学 学生会員 ○ 石関 明恵  
千葉工業大学 正 会 員 篠田 裕

### 1. 研究目的

古来から、日本には、自然を尊び、敬い、崇める思想が存在し、尊ぶと同時に居住空間に緑を取り入れる趣向が存在する。茶人たちは露地や坪庭を作り、茶室から見える風景に趣を楽しみ、古の権力者たちは巨額の資財、幾年もの時間を使って、後世に残る傑作庭園を作り出した。

日本庭園は、自然をベースにして、その時代の文化・宗教・思想を表現し、さらに大陸から流入した文化と思想が、日本の文化と融合し変化してきた。

本研究は、日本庭園の配置・造園方法を現地調査によって調べ、その中から江戸時代以前の枯山水様式庭園を抽出し、水景12形態によって分類、現代の水景施設と水の無い枯山水式庭園との比較により、枯山水の流水を考察することを目的としている。

### 2. 日本庭園の歴史と時代別様式

日本に、日本庭園たる思想が発祥したと考えられているのは、仏教が伝来した6世紀終わり頃であるとされ、以後、時代によって様々な変化を遂げた。

飛鳥時代以前では、高貴な身分の人々が庭に池や苑を造り、舟遊びや禽獣を飼って、雅な時間を過ごしたとされている。奈良時代には、かつて奈良県に阿弥陀浄土院が造営されたとの文献記録があり、平安時代には平等院(図-1)を始めとする、公家・貴族の寝殿造建築と一体化した船遊式地泉庭と曲水庭が発展した。鎌倉・南北朝時代には、称名寺、浄瑠璃寺など武家が禅に帰依したため、書院造建築と禅の庭園が誕生した。また室町時代には、西芳寺や鹿苑寺などの滝と石橋を主題とした池泉庭と枯山水が発達し、桃山時代には、二条城二の丸、醍醐寺三寶院のような枯滝と蓬莱山を形づくった神仙思想に基づく庭園が生まれた。そして、江戸時代に入ると、兼六園や水戸偕楽園などの大名による大池泉庭が次々と築かれ、また景観を庭内に再現する縮景式庭園も多く造られた。一方で、桂離宮や修学院離宮のような、自然の美しさに基礎を置いた宮廷式庭園も造られ、さらに明治時代からは、迎賓館庭園を始めとする近代的な西洋式庭園も造られた。



図-1 平等院

### 3. 日本庭園の区分

多種多様な日本庭園は観賞の仕方や造形の形式によって、以下のように区分出来る。

#### 1) 観賞方法による区分

回遊式庭園：庭園内を移動しながら鑑賞する庭。

書院式庭園：屋内から鑑賞するための庭。

#### 2) 形式的相違による区分

築山式庭園：庭の一部に人工的に盛り土した(もしくは自然の)山がある庭。

平庭式庭園：庭全体にほぼ起伏がなく、平らな面に作られた庭。

池泉式庭園：水を景観の要素として取り込んだ庭。

池泉舟遊式：舟を浮かべて鑑賞する庭。

池泉回遊式：池の周囲を廻って鑑賞する庭。

池泉鑑賞式：書院等の室内から鑑賞する庭。

流水観賞式：流水を主体に構成された庭。

枯山水式庭園：水を用いず石や砂利などで山水風景を表現した庭(主に山の斜面に作られた前期式と寺院の平庭に作られた後期式に分類される)

平庭式：平庭に砂や苔を敷き詰め石組みする庭。

準平庭式：庭全体を平地とせず、一部に盛り土するなどして中島や築山、枯滝を配した庭。

築山式：築山を築く、または山の斜面を利用して作庭された庭。

枯池式：水を用いず池庭のような形式にした庭。

枯流式：流れを象徴して枯流れとした庭。

露地(茶庭)：茶室に付随して造られる庭。

草庵式：侘び本位の茶室に付随した露地。

書院式：書院式の茶室に付随する露地。

一般に広間の席に対して作庭される茶庭。

坪庭：建物の中に取り込まれた比較的小面積の庭。

### 4. 現地調査

本研究では、浄土式庭園、寝殿造式庭園、書院造式庭園、露地、前後期式枯山水の傑作庭園を中心に現地調査を行い、思想と造園の関係性を確認する。庭園は季節や時間によって様々な風情を描き出すものであり、現地の風土や気候を実感しなければ検証出来るものではないと考えたためである。

そこで、各時代、様式別に区分した中から独自に選定した日本庭園の現地調査を行った。

調査した庭園は、岩手県西磐井郡平泉町の毛越寺、観自在王院、京都府宇治市の平等院、北区の鹿苑寺、大徳寺、源光庵、左京区の慈照寺、南禅寺、右京区の竜安寺、天龍寺、西芳寺、東山区の東福寺、芬陀院(雪舟寺)、石川県金沢市の兼六園などである。

## 5. 枯山水の独自性

平安時代の庭園が豪華絢爛な庭であったのに対し、鎌倉時代になると折よく新勢力となった武士階級の禅宗の興隆から、その特有の自然観をもとに禅宗寺院を中心に枯山水が発祥した。元来、禅宗寺院の方丈の南側は儀式をとり行うための、清浄を意味する白砂を敷き詰めた無塵の庭となった。しかしその後、儀式が室内となったことから南庭は用いられなくなり、瞑想や座禅の場にふさわしい造景として枯山水と言う庭園スタイルが発展した。そして、室町時代においては12年間にも及ぶ応仁の乱のために京都が焼け野原となり、その経済的影響で従来の池庭を造園することが不可能となった経緯も、枯山水を定着させる機会となったと考えられる(図-2)

枯山水は遊楽・散策などの実的要素を持たず、屋内から静かにこれと対峙して鑑賞するよう構成されている、高い精神性と抽象性を凝縮した、庭園史の一つの頂点を極めた様式である。



図-2 天龍寺

## 6. 枯山水の意匠

枯山水には水を用いずに比喩的に山水を表現するために、古くから様々な庭園意匠が存在する。以下、いくつかの意匠について述べる。

**神仙島・蓬莱島**：神仙思想によると、仙人が住む神仙島は東方の遥か海上や雲上にあるとされ、その島々の中で一番高い蓬莱島を中心に方丈、瀛洲、壺梁の四島からなるとされている(図-3)

**鶴島・亀島**：長寿を願って作られる鶴島と亀島は、その多くは蓬莱島と共に庭園に表現されている。鶴島は翼を表す羽石に特徴がみられ、亀島は石組みによって頭や足などが表現されている。

**須弥山・九山八海**：仏教の宇宙観では世界の中央にそびえる山を須弥山と言い、その周囲を九つの山と八つの海が囲んでいるとされている。須弥山を表現した石組みは傾斜して立つ巨石を中心として周囲に多くの立石を配している

**三尊石組み**：仏像の配置に三尊仏と言う形式があり、中央を阿弥陀如来とすれば、両脇に観音菩薩と勢至菩薩が配置され三尊仏を成す。三尊仏に見立て、中央の立石の両脇に小立石を配した三個の石組みを三尊石組みと言う。

**龍門瀑・鯉魚石**：中国の故事にある「登龍門」の由来である鯉が、三段の滝を登って将に龍に化す様を現している(図-4)

**枯池・枯滝**：水を使わず、石や苔、砂利などを用いて池や滝を表現した意匠(図-5)



図-3 瑞峰院



図-4 金閣寺



図-5 天徳院(石川県)

## 7. 水景12形態

水と親しむこと(親水)を目的とした人工の水関連施設のことを「水景施設」と呼ぶ。水の姿態で4種類(噴水、落水、流水、溜水)、利用形態で3種類(親水施設、修景施設、自然観察施設)に分けることができ、それぞれの組み合わせで12の形態が存在する。

本研究では、水を伴った水景施設に適用される「水景12形態」を、水が使用されていない枯山水様式庭園に適用・分類し、考察した。

その結果、枯山水と言う庭園様式は周囲の風景との調和を重んじながら、白砂や苔、石、四季の変化や時間の経過を利用して、池や水面、滝だけでなく、大海や宇宙を表現することが可能である。そして、利用形態の各要素を満たす造園手法で、より洗練された水の存在を具現化していることが考察できた。



図-6 水景12形態